

農研機構と全農が共同開発した 米の多収品種「ZR2」

実需者との複数年契約栽培を基本に令和8年作付け開始

全農では、生産者の営農の安定、所得の拡大に加え、拡大する業務用需要に対応するため、実需者からのニーズに応じた契約栽培など、生産提案型事業を進めています。

契約栽培の取り組みを進めていくなかで、実需者からは「良食味で加工適性の高い米を使用したい」、また生産者からは「作期分散が可能で栽培しやすい早生品種を提案してほしい」などの要望が多く出されました。

このため、全農では、農研機構と共同で米の新品種の開発に着手し、農研機構が交配、開発してきた有望系統を全農が生産者、実需者ニーズの観点から選抜するという分担により、令和5年12月に、耐倒伏性があり、病

害に強く、多収で良食味で熟期が「あきたこまち」と同程度の品種「ZR1」を発表しました。

さらに、出穂・成熟期が「コシヒカリ」とほぼ同等となる品種「ZR2」を品種登録出願し、「ZR2」の作付けが令和8年産から始まりましたので紹介します。

「ZR2」の特長(図1)

「ZR2」は、出穂・成熟期が「コシヒカリ」とほぼ同等となる品種で、多収である分、成熟期は「コシヒカリ」よりやや遅くなる傾向があります。

・「関東275号」と「北陸263号」(にじのきらめき)を掛け合わせています。

図1 「ZR2」の品種概要

全農

全農・農研機構 共同育成品種



ZR2

- ・登録出願年：2025年(令和7年)
- ・育成地：農研機構 作物研究部門
- ・組み合わせ：関東275号／北陸263号(にじのきらめき)

栽培適地 出穂・成熟期

- ・栽培適地は北陸、関東以西
- ・出穂期は「コシヒカリ」とほぼ同じで、成熟期は「コシヒカリ」より10日程度遅い

特長

- ・**極多収**で倒伏に強い**短強稈**の特性を持つ
- ・縞葉枯病に**抵抗性**
- ・4-HPPD阻害型除草剤に**抵抗性**
- ・葉いもち、穂いもちともに**“やや強”**
- ・玄米品質・食味ともに**良好**

農研機構作物研究部門の試験成績(茨城県つくばみらい市)

栽培方法	品種	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	倒伏程度	精玄米重 (kg/10a)	同左比率 (%)	玄米千粒重 (g)	玄米品質
標肥栽培 (令和3年～令和6年)	ZR2	7月29日	9月12日	72	0.1	687	125	21.7	5.2
	とよめき	7月25日	9月10日	83	1.8	686	125	22.3	6.4
	コシヒカリ	7月28日	9月4日	101	5.8	551	100	21.2	5.9
多肥栽培 (令和3年～令和6年)	ZR2	7月29日	9月18日	75	2.0	739	141	21.0	5.4
	とよめき	7月26日	9月16日	86	3.0	733	140	21.7	6.1
	コシヒカリ	7月29日	9月7日	104	7.8	524	100	20.9	5.6

倒伏程度：0(無)～9(全倒伏) 玄米品質：1(上上)～4(中上)～9(下下)



メディア向けに「Z R 2」を紹介

・短強稈で倒伏に強く、高温登熟性は「中」、屑米割合は「コシヒカリ」の4分の1程度と少なく、食味は「とよめき」より良好です。

・育成地（茨城県つくばみらい市）での収量は、窒素施肥量が基肥 8 kg/10 a での標肥・移植栽培では 687kg/10 a（令和3～6年の平均）、窒素施肥量が基肥 12kg/10 a での多肥・移植栽培では 739kg/10 a（令和3～6年の平均）で、全国で広く栽培されている「コシヒカリ」より約2割多収となりました。また、令和4年の現地試験（茨城県水戸市）では、最大で 739kg/10 a の収量が得られました。

・縞葉枯病に抵抗性、4-HPPD阻害型除草剤に抵抗性があります。

・葉いもち、穂いもちに対し“やや強”となっています。令和8年産で「Z R 2」を栽培している茨城県からは「7月上旬時点の生育は順調で、草丈は他品種に比べ短く、倒伏のリスクは低そう」という報告を受けており、短稈であるという「Z R 2」の特性が発揮されています。

「ZR2」栽培の注意点

「Z R 2」を栽培する場合、いくつかの注意点があります。

- ・障害型耐冷性は「弱」のため、東北以北での栽培には注意が必要です。
- ・穂数型品種であるため、適切な茎数を確保することが必要です。
- ・穂発芽性が「中」程度と評価されていることから、刈遅れには注意が必要です。

「ZR2」の契約栽培

基本的に「Z R 2」は業務用米の実需者へ供給となります。

全農は、生産者と実需者の間に立



「Z R 2」栽培圃場

ち、複数年契約栽培の取り組みを提案していきます。

生産者にとっては、「Z R 2」は一般品種よりも 60kg 当たりの単価が低くなりますが、収穫量が一般品種よりも多くなることから、面積当たりの収入は一般品種と同等以上になることが期待できます。

また、最低保証単価・出荷数量を実需者と複数年で契約締結することで、生産者は契約期間中の収入を見通すことができ、さらに「コシヒカリ」の熟期と同等の品種栽培の一部を「Z R 2」に切り替え、収穫作業の時期をずらすことで、作期を分散できます。

実需者にとっては、複数年契約栽培によって調達価格・数量が見通せること、生産者にとっては「つくる安心」「売れる安心」が担保される、と双方にとってメリットがある取り組みです。

「ZR2」の作付け目標

全農では、生産者と実需者の契約栽培の取り組みを進めつつ、2027年産（令和9年産）に 250ha（約 1,500 t）、2030年（令和12年産）に 2,000ha（約 12,000 t）の作付けを目標としています（図2）。

【全農 米穀部】

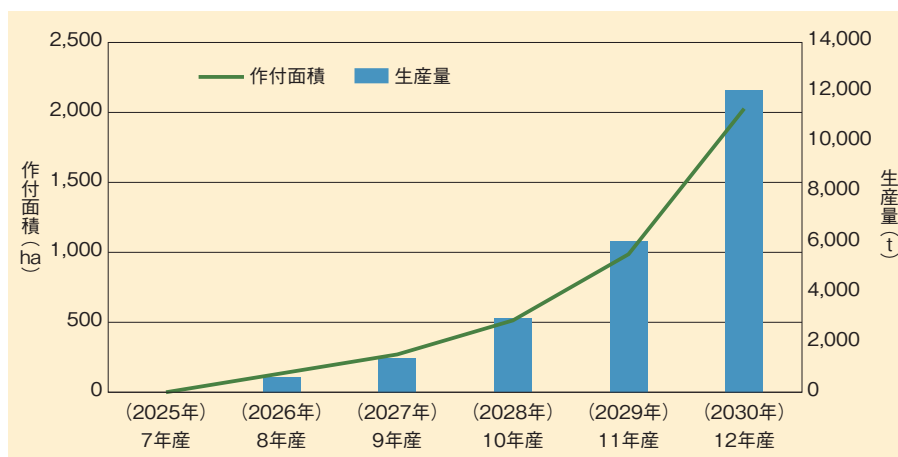


図2 「Z R 2」の作付け目標